一人ひとりの発達の課題に即した指導の工夫

宇都宮大学教育学部助教授　青柳宏

１　「窓」

○「窓」（山中康裕氏、２００６）をもっている子

・山中氏は、釣りが好き、ある音楽グループが好き、という子どもの自分なりのこだわりを「窓」といっている。「窓」という言葉は、例えば釣りの世界を「窓」にしてそこから外の世界を見ようとしているのだという意味をこめて、あえてこだわりと言わず、「窓」と言っている。自分は、スクールカウンセラーをしていて、不登校の子を見てきたが、たとえ学校に行けない子でも、この「窓」をもっている子は、安心なのではないかと思う。＊山中康裕『心理臨床学のコア』京都大学学術出版会、２００６年

≪山中氏が紹介しているある一人の男の子≫
イギリスのある音楽のバンドの４枚目のアルバムがいい。なぜいいかというと、メンバーが勝手に演奏しているようで実はちゃんとあっている。それでいて、個性が出ているから、と言っている。この子は、音楽を「窓」にして人間の在り方、世の中を見ている。

≪私自身の小さな事例：ある小学校の女の子≫
うちの子は、人間が嫌いらしい、心配だと母親。しかし、この子はミドリガメが好きで、そのカメの餌を夜通し探し回ったという。カメは「窓」になっているのではないだろうか。

・世の中に適応できない子でも「窓」をもって、世の中へのまなざしをもっていれば長い時間をかけて心が開かれていくのではないか。

○「窓」をもっていない（もてない）子

・最近「窓」をもてない子どもたちが多くなってきている。何にも興味がわかない、何をしてもおもしろくない、死にたい、とばかりいう子が増えてきている。

・スクールカウンセラーの仕事をしていて子どもの背景が以前より見えてくるようになった一方で子どもと心が通わなくなってきたなあと思うことが多くなった。「この子は～な背景をもっているのだろう」と分かった気になって、その子への尊厳の気持ちというものが薄らいできてしまっていると感じる。言葉でない交流がもてなくなってきている。だから私自身は、今、もう一度、子どもの心に共感していくということを課題にしなければと思っている。

・子どもが「窓」がもてず、さらに私自身が子どもと交流をもてなければ、なおさら事態は悪くなる。この子はこういう子だろうという推測からは子どもとの交流はなかなか生まれない。自分は、このような悩みを抱えた時、津守真さんの『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）を読みかえす。一人一人に寄り添うことを深く考えさせられる本。

２　「窓」を生み出すのは？

○「存在感」と「自発性（能動性）」

・世の中に受け止めてもらえているという存在感、この世の中で自分で何かをやっていくという自発性、能動性が育まれてきていることが「窓」を生み出す。

・自分の中で残っている幼児期の記憶がある。それは自宅の廊下でウルトラマンの絵を描いていたこと。この記憶は、自分にとって自発性が育まれていた時の記憶。自分の中でバランスよくウルト

ラマンの顔が描けることを追求して何度も飽くことなく挑戦をしていた。ウルトラマンの絵は自分にとっての「窓」であった。

・イタリアのレッジョエミリア市の幼児教育のビデオを見て自分の廊下の記憶が重なった。それは、例えば美的な比率を子どもが思考しているとする。それを隣で見ている子が３，４人くらいいる。一人の子どもがあることを探求していて、隣の子もやはり何かを探求している。その間で相互作用が起きている状態、その状態をイタリアの幼児教育は追求している。追求している者が隣にいるからその隣の子も目には見えないけれども探求が進んでいくという意味での協同性がイタリアの幼児教育にはある。自分が廊下でしていたことが少しずつ広がっていくとこのような幼児教育の形になるのかなと思う。

・逆にそこから日本の幼児教育を見た場合に気になることがある。日本の場合は、協同性というと目に見える形で協力し合ったりとか、思いやりを求めたりとか、そういう形に子どもたちをはめ込んでいくようなところがある。そういうことが多くなると、「窓」はもちにくくなっていくだろう。協同性は、追求している者同士の間で起こるもの、見えないものだと考えることが大事。

○「乳幼児期」と「１０歳」

・１０歳（小学校４年生）ということを重く捉えるという考えがある。自分も父親の言葉、行動を批判的に見るようになったのが１０歳の頃。この頃は「理（ことわり）」というものを意識して人を見たり物事を考えるようになる。正義感が強くなる。父親の言ってること、行動が本当に正しいのかという子どもなりの正義感。はっきりした価値観というまでは高まっていなくても、それなりの正義感がもてるということは、ある基準から自分を評価できるということにつながっていく。

・親離れは１０歳の頃から始まっている。大人はそのことにもう少し敏感になってもいいのではないか。小学校時代に大人に全く依存する形で大人の言うことを絶対視して過ごしてしまうと自分の中に基準が生まれてこないので思春期になってからどんなふうに自分をつくっていくかという力がもろい。小学校中学年からその力がＵＰしてくる。その時に大人が「自分はこういうところが悪かった」と子どもに言うことができたら、子どもと対話をすることができれば、子どもはそのことを力にして自分を評価できるようになっていく。自分をつくれるようになっていく。反対にその力が弱いまま育った子は、思春期に入った時に自分の中に起こる性的な欲求や様々な欲求、攻撃性にどのように対処していったらよいかという自我の力が弱いまま思春期を迎える。そうすると問題行動となって現れる。

・１０歳になってせっかくいくつかの視点から考えて正義感をもって大人の世界と向き合い始められるのに、大人が「いい子好き」すぎる（いい子に基準をおいて子どもに求めてしまう）と自我の力を育てられずにいってしまうのではないか。１０歳前後からパワーアップする自我が育まれれば、たとえ学校に行けなくても「窓」を通して人を見つめる、世界を見つめるということができるようになるのではないかと思う。

・様々な子どもの問題が出るたび、忍耐力が弱まっていると感じることはある。しかし、ただ忍耐力だけを切り離して子どもに求めてはいけない。根本は自発性。こういうことをしたいと思うからこういうことは我慢しようと思えるのであって、忍耐力だけを子どもに求めると逆効果。

＊「１０歳」が「理（ことわり）」を意識する年齢、というとらえ方は、特に田中昌人氏の『子どもの発達と健康教育④』（かもがわ出版、２００２年）による。

３　「発達」とは？

○「外的発達」、「内的発達」（津守真氏）

・「外的発達」・・・○歳になればこういうことができるようになるという見方
　「内的発達」・・・自分の中にやりたいことがあってそれを実現したくてやり抜いていくという自発性の現れ。

内側からの子どもの発達ということを考える。「内的発達」という視点で発達が見られるか。

・「内的発達」の核は存在感、自発性。例え何かが出来るようになったとしてもそれが本当にその子の自発性から生み出された行動なのか、と疑ってもいいかもしれない。何かが出来るようになることがいいことだという大人の目にさらされると子どもは一生懸命出来るようにするかもしれないが、それが本当に自発的に実現していることなのか、と見る目が必要。

○「窓」は、大人（教師）にとっては、子どもの内的発達を見る一つの「窓口」

・私自身は少年時代、釣りが好きだった。人からは、ただ魚を釣っているだけ、よく魚の本を読んでるな、くらいにしか見えないが、自分の中では、人が自然の中で生きることはいいことなんだろうなあなど、ある価値に向かって、こだわりをもって釣りを「窓」にしていたと思う。「窓」がなんであれ、その子がなぜそれにこだわるのか、深く考えていけば、その子の内的発達が捉えられるのではないだろうか。

・スクールカウンセラーをしていて､その子が何に興味をもっているのかと担任の先生に尋ねるが、答えられる先生は僅かしかいない。問題行動を起こしてしまう子に対して、どうしてそういうことをしてしまうかということはよく考えるが、問題児だと見てしまうとその子にとっての「窓」は何なのかということは見失われてしまう。好きなことは何なのか、その子が求めているものは何なのか、その求めているものが発達の課題。そういう見方がもう少し、浸透していったらいいなあと思う。

４　津守真氏の『保育者の地平』（ミネルヴァ書房、１９９７年）から

・子どもの行動は表現である。その表現を理解するためには自分を変えないと理解できない。（津守）

・ある子はお弁当を朝半分食べて半分投げ捨てるという行動を繰り返した。なぜか。その子を見ていると、その子が遊び始めても他の子にじゃまされてしまう。中途半端な形で遊びが中断されてしまう。そのことを表現しているのだろう。

・ある子は、トイレの水が流れるのをじっと見ている。繰りかえしみている。なぜか。現れては消えていく、でもまた現れる。そのことの意味を感じ取ろうとしている。大人にとっても得たものを失っていく、そしてまた現れるということの意味を感じることは課題である。

・こういった行動を表現としてとらえるためには、大人は自分の理解の枠組みを変えないと、理解できない。子どもの行動を言葉の次元で捉えないで、子どもと同じように動くことで体のレベルで感じ取ってそれから言語化していく。それでもずれているので、もう一度動いてみる、そして言語化してみるといった繰り返しの中で子どもの行動の意味をつかんでいくのだということをこの本では、表現している。

・自分の力を精一杯に出す場合を「実の自己実現」というとすれば「虚の自己実現」というタイプがある。後者の子は何もしないことを楽しみ、人目につかない周辺から庭の真ん中で遊ぶ子を片隅で眺めたりしている。保育者は、そういう子をなんとか友だちの中に引き入れようとしがちだが、子どもの在り方をこれでいいのだと捉え、一緒に腰を下ろし眺めると違った世界が見えてくる。（津守）

・「内的発達」からみれば、はたから見て、何もしていないように見える子、「虚の自己実現」も自己実現だと感じ取れるかどうかは、保育者に係っている。

５　集団の中でいかに「自発性」を育むか

○「見えない共同性（協同性）」を！！

・見えない協同性を大事にする。見えない協同性を見ようとする。子どもを教師の鋳型にはめようとしないで、かかわりの中で何が実現されようとしているのか、この時期の子どものかかわりの意味は何なのかということを見極め、どうかかわっていくかということが課題であろう。

・一人の子の行動をどうとらえるかというのは、集団の中でも、一番の根本であろう。その上で集団での保育ということを考えていく必要がある。

・（宇大教育学部附属幼稚園のビデオの中の）子どもたちは、集団に縛られるのではなく、一人ひとりが自分のイメージを追求している。周りにもやはりそういう子どもたちがいて、なおかつ目に見えないけれども、相互に影響しあっている。刺激しあっている。集団の中で広がっていく子どもたちのイメージ、あるいは集団の中でこそ広がっていく一人ひとりのイメージを感じる。

・集団と個が矛盾しない保育の在り方はいろいろな形で出来ると思う。

・学校に行けていても行けていなくても、「窓」をもっている、正義感をもって自分を評価できる１０歳の発達を準備するのが乳幼児教育の使命だと思う。この子たちがこの子たちなりの「窓」をもてるかという視点で保育を振り返ってみてもいいのではないか。

・日本の教育は集団に合わせることがとても強い教育だと思う。そのことがややもすれば人に合わせることを強調しすぎて「窓」をもてない子をつくってしまう、いろいろな発達の問題が出てくるということもあるのではないかと考えている。

＊「大切なものは目に見えない（星の王子さまのセリフか？）」